

秋田県の碇の形態に関する一知見

Types Of Anchor In Akita Prefecture

嶋田 忠 一*

Tadakazu SHIMADA

はじめに

碇に関する調査研究の成果は石井謙治氏に詳しい報告¹⁾がある。それによると、

まず、用字に関して、

- 今日では錨が慣用されている。これは明治以後のことらしい。
- 江戸時代には碇が慣用。ときには鉄碇の意味からか、錠をあてた誤用例がある。
- 奈良時代の『万葉集』では、イカリの字に重石・重・楯があてられている。『播磨国風土記』では沈石をあてている。
- 平安時代の『和名抄』になると、本来の漢字である碇の字があてられている。平安時代にはすでに碇の字が定着し、これがその後の碇の形式の変化には関係なく、江戸時代まで慣用されることになる。

と述べている。次いで形式の変遷をあげて、

- 日本の船の碇はごく大雑把にいて、石一木碇一鉄碇という三段階を経て発達した。

といい、石の段階を知る資料として大阪の高井田古墳壁画を、木碇の例として『枕草子』や『松崎天神縁起絵巻』、『川口遊廓図屏風』中の描写を示した。それとともに、鉄碇がいつ頃から使われたのかにふれ、永享5年(1433)筆『神功皇后縁起絵巻』中の四爪鉄碇を初出とされた。このなかには、木碇と四爪鉄碇の両様式が共に描かれていた。これらを勘案し、

- 鉄碇の出現によって、ただちに木碇は駆逐されたのではなかった。これから一世紀半も後の近世初期でも木碇は依然として主用され、鉄碇は金に糸目をつけない大名の軍船などで使う程度であった。

と述べられた。

以上のごとき、全国的な変遷史の大略を念頭におい

て、秋田県という限られた地域での知見を頼りに、研究の方法といったものにふれてみる。なお、本稿では、イカリは全て碇で統一し、それに適宜、材質をあらわす木・鉄を用い、爪の数をあらわす片爪(一爪)、両爪(二爪)、四爪などを付して用いた。また、碇の各部の名称は、四爪碇の呼び名(最後掲)を援用し、それ以外は、その都度調査において得られた呼称を使用した。挿図は、実測図を用いたが、なかには写真よりおこした図がまじることをつけ加えておく。

I 木 碇

さきに、石井謙治氏によって示された木碇の図をみると、カギ状の爪をもったタテ割り材で、うすく割られた石材を左右からはさみこんだ形式であった。これ^{挿図1}らは、鎌倉時代以降の絵巻、風俗図などでも知られる。本県で同型のもの^{挿図2}の知見はない。ただし、木と石からなる碇ということからすれば、マッケヤなどと呼ばれてきたものが、それにあたる。

1. 昭和町漁労用具収蔵庫蔵・マツキャ

八郎瀧で使用された、船曳漁用であるが、用法等は不明部分がある。素胴は杉の丸太、爪部は杉材の別材で、素胴下のホゾにはめこまれている。爪先端には鉄板がかぶせられ、突っこみやすさ、切れのよさを与えている。爪の開きを固定するために、針金が爪と素胴をつないでいる。カンザシは2本あり、素胴を貫通している。このカンザシに、左右1コずつの石がしばりつけられている。龍頭にあたる部分には縄製のチがとりつけられている。しかし、現状では、碇綱や碇頭綱がどうなっていたのかは不明である。なお、同収蔵庫のキャプションは、以下のように述べている。

「マッカ

木製の錨である。石をとりつけた部分をカンザシ

* 秋田県立博物館

という。フナビキ（船引）網漁業などで使った」
また、別に、

「マッキヤ木錨（国指定重有民文）

杉丸太、松丸太などに石をつけて作製する。船曳
網漁業などに利用され、鉄などがまだ貴重な時代
に使用された錨である。潟は浅いので、潟の西側
など深いところで多く使われた。」という。

2. 象潟町郷土資料館蔵・マッケヤ

1988年7月に、象潟町小砂川住小林福蔵氏によって
製作されたものである。同氏が40年前に使っていたも

のを思い出しながら製作したという。主材は、地元で
いうコメナラの木（堅木で樫の類という）。カンザシは
杉材、浮きは桐材。立木の枝分れした部分（マッカ）
をそのまま爪に利用した、一木を特徴とする。カンザ
シは素胴にボルト締めになっている。爪外側とカンザ
シ両端にそれぞれ石が結びつけられている。小林氏に
よると、カンザシの位置や長さ、石のとりつけ位置や
重さなどは使いながら修正したものだということであ
る。いずれにせよ、この碇はどんな状態の海底にも対
応できることが利点だといい、さらに、重さのわりに



挿図1 木碇の図＝蒙古襲来絵詞（部分）＝

※原本は宮内庁侍従職蔵。同職の許可を得て中央公論社版
「日本の絵巻」13、p90より転載す。

浮力があって操作しやすく、長もちもするというのである。現在は、全て鉄製のマッケャになりかわっている。

3. 仁賀保町平沢・マッケ

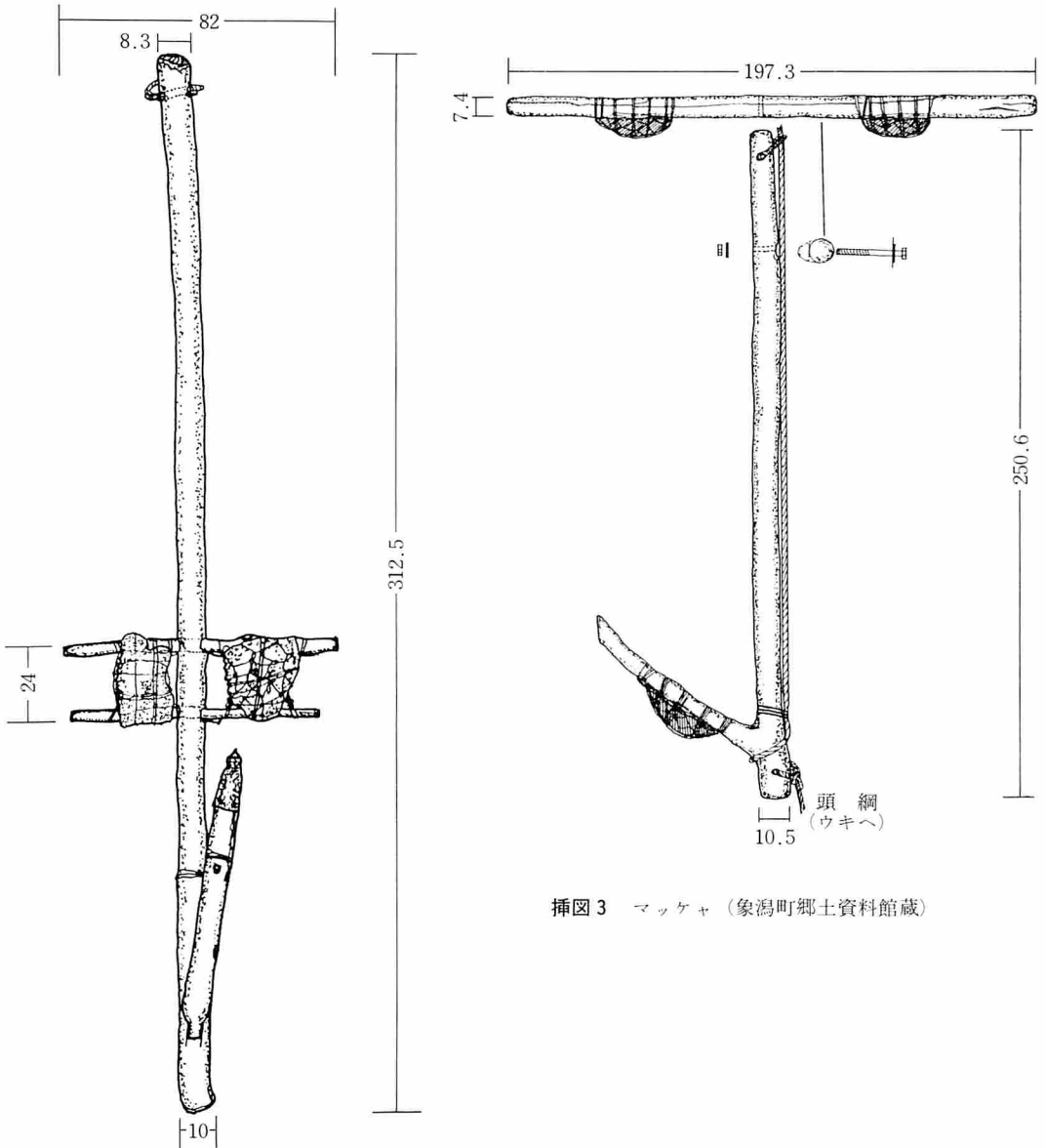
平沢では実物を見ることはできなかった。聞くところでは、前の2例よりは、小型のものらしく、1m程の長さの木の枝分れを利用したものようである。カンザシは、爪に近い位置ではなく、龍頭側によってい

たらしい。そして、龍頭から綱をのぼし、その先に石を結び、浮きあがらないようにしていたともいうのである。この小型のマッケは、停泊用ではなく、鰯の流し網用碇として、昭和34～35年頃まで使われた。その後、流し網がたてられなくなるとともに消えていったのである。

(挿図4-5)

4. 男鹿市寒風山展望台資料館蔵・マッケャ

この資料も実資料としては一部、つまり、カンザシ



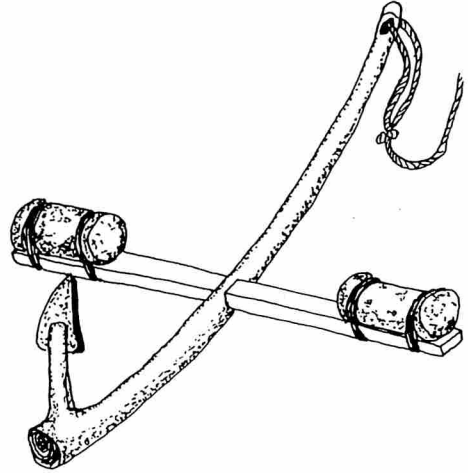
挿図2 マッケャ (昭和町漁労用具収蔵庫蔵)

挿図3 マッケャ (象潟町郷土資料館蔵)

の両端に使われた「マッケヤ石」しか残っていない。ただ、装着方法を示した図が同館の展示室にあるので参考になる。挿図4が全体図、5がマッケヤ石の略図である。いずれも写真をもとにしておこした図である。これによると、いわゆる木のマッカを利用した素胴とそれにさしこんだ角材のカンザシとからなりたっていることがわかる。そのカンザシの両端に寒風石製のマッケヤ石がとりつけられるのである。爪先は鉄板だろうか。マッケヤ石のキャプションには、次のようになっている。

「マッケヤ石

寒風石製の碇に使用した石。マッカ、ケテともいった。ケヤキの木を図のように(挿図4)加工した碇とした。明治末年頃まで使用した。」



挿図4 マッケヤの図 (寒風山展望台蔵)

II 鉄 碇

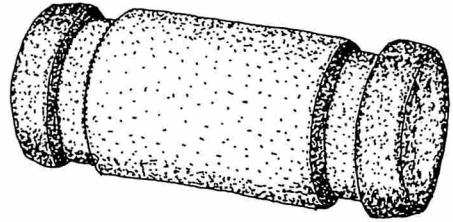
鉄製の碇を鉄碇カナイカリとした。したがって、今日使用されているものは全て鉄碇ということになる。次に、それらを形態別に、爪の数ごとに述べてみよう。

〔片爪〕

(挿図6・7)

1. 象潟町小砂川・マッケヤ (現在秋田県立博物館蔵)

2本とも同型。この片爪碇は停泊用で、名称は木碇と同じマッケヤである。材質の変化はあったものの形態的にはさほどの変化ではなかった。しかし、構造的にみれば、カンザシ環の位置が爪近くによってつけられ、合理的な浮力をうみ出す位置を得たことになる。全体は素胴部と爪部、カンザシ環からなっている。環は別に鍛えたものを素胴部に埋めこむように打ちあげられている。この環に雑木をとおし浮力をもたせ、確実に爪先から着底するように工夫されたものようである。このカンザシの役割りは、後に述べる鉄製の、龍頭に近い位置のそれとは大いに異なるものである。カンザシは雑木1本でもよいが、使い調子をみながら1本は環をとおし、もう1本は環の外に渡して、先の1本と合わせてしばりつけるなどして使用される。龍頭には通常、縄など強く引けば切れるようなものでチをつくっておく。碇綱は、カンザシ環とカンザシを抱きこんでしばりつけ、素胴にそって龍頭のチをとおり船上へのびる。浮きは、爪の最深部付近に結んだ綱(頭綱)の先につける。小砂川付近は岩場があるため、マッケヤが岩にくい込むことがあるという。そんなとき



挿図5 マッケヤ石 (同上蔵)

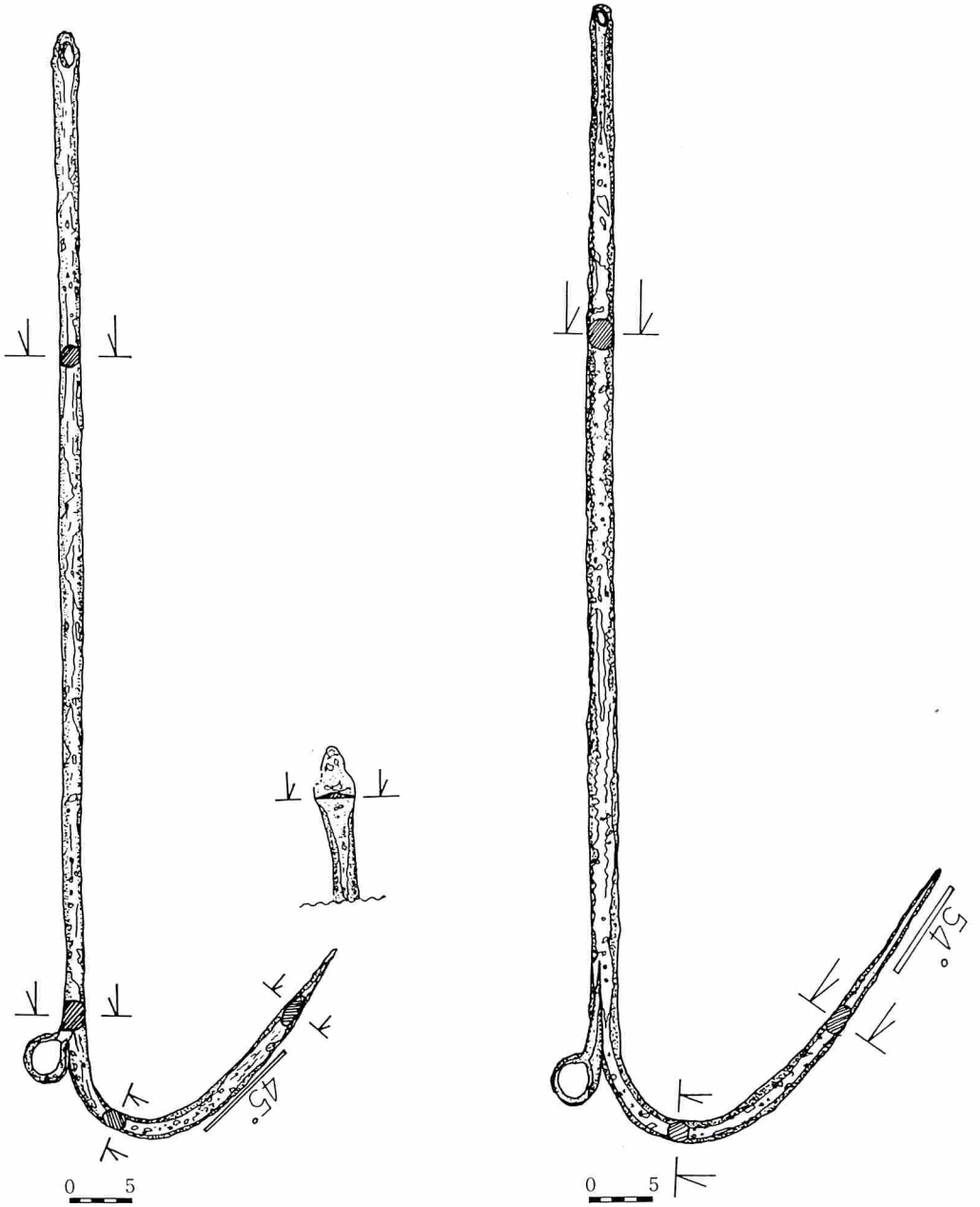
は、まず碇綱を強く引き、チを切ってしまう。それから船を碇の反対へまわし、今度は爪の貫入方向とは正反対から引き抜くのだというのである。実に合理的な操作方法を実施していることになる。なお、爪の角度も小砂川造りと象潟造りの違いがあり、それぞれの浜にあう、あわないがあるともいっている。

2. 八郎潟漁労用具収蔵庫蔵・イカリ

停泊用片爪鉄碇である。爪先は木の葉形に鍛えている。カンザシは、素胴中央付近に両側から既製の鉄棒を熔接している。現状は、碇綱のみつく。浮きはない。なお、このタイプのカンザシは、1のマッケヤに比較して、浮力をもたせるよりも、着底の際に横倒しになるのを防ぐための支えとして機能すると思われる。また、片爪鉄碇の場合、爪部から着底する割合に不安があったものようで、仁賀保町平沢で聞いたところでは、両爪の方がかかりやすいということであった。

3. 同 挿図9 上・イカリ

後掲の図は、写真よりおこした停泊用鉄碇の図であ



挿図6 マッケヤ (館蔵)
重さ1.5kg

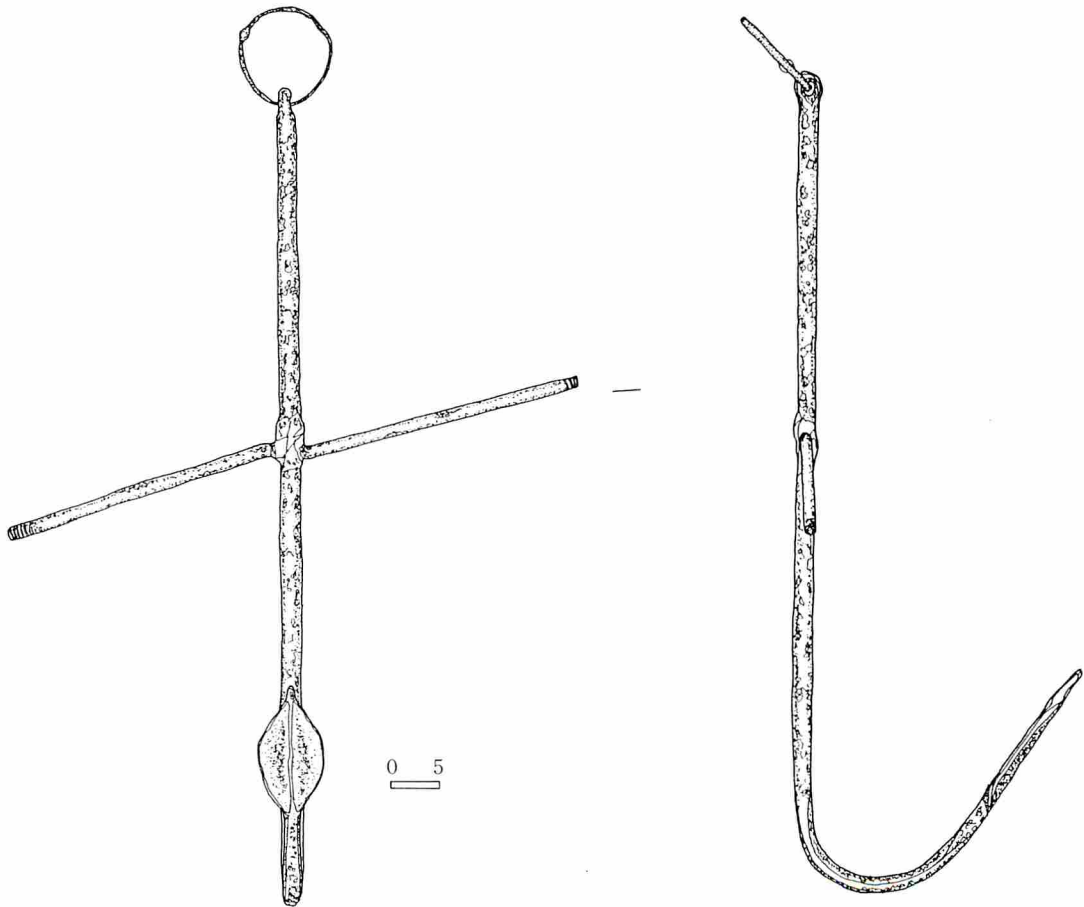
挿図7 マッケヤ (館蔵)
重さ3.5kg

るが、同一サイドに2本の爪を出すイカリである。丸い鉄棒を基本に、龍頭部分と爪部を角に打ちなおしている。カンザシは、龍頭側に片寄り、既製の鉄棒を素胴にさし込んでから熔接している。龍頭部はカンザシ付近から爪とは反対側に曲げ、力がよりかかりやすくしている。爪先は、別製の鉄板を鋏先状に切り、鋌止めをうえ熔接する。爪は基部より二股に割り、爪先とあいまって底泥、土をつかみやすく改良がほどこされている。おそらく、八郎潟の水底にあわせた改良点であったろう。

4. 金浦町金浦漁港知見・シオマツケ

前掲、片爪鉄碇をさらに大型にしたもので、漁網用である。主に建網の足碇として現在も使われている。これを入れることによって、どんな大シケにも耐える

という。ただし、ほかから流れてきた網がのるとたちまちバラバラになってしまうともいう。いずれ、今なお、大型化をたどりながら建網には欠くことのできないものとなっている。これは、両爪だと一方が底にかんだ時、もう一方があそんだ状態になり、ややもするとそれに網がからみ穴をひろげてしまう恐れがあることから、片爪型の方が便利だということのようである。加工も両爪よりは、はるかに簡単なわけであるが、網の大型化とともに、地元の技術だけでは対応しきれなくなり、現在は大量に生産される北海道や酒田方面から運賃をかけても、安いといって調達されている。いずれにせよ、現在の碇は、使用頻度の減少（機関の高性能化、漁の定時性）により、停泊用よりも建網固定用に集約されつつあるようである。



挿図8 イカリ（八郎潟漁労用具収蔵庫蔵）
重さ3kg

同形式のものは、象潟町大須郷浜でも見られた。こちらのものは、4～5年前まで使われていたもののように、主に鯛定置網固定用だったという。全長約205cm、胴部径4.5cm、爪の長さ70.5cm、カンザシの長さ215cm。爪の角度約28度であった。これは県内全域に見られる型。

5. 男鹿市加茂青砂漁港知見

今夏たまたま加茂港にて見たもので、現在は建網の下になっているようである。後の機会に図を設けたいと思う。本品は、直径4～5cmの鉄パイプを基本にした片爪鉄碇である。爪と素胴部の開きをおさえるためワイヤーで支えられ、爪先は鋏先状の鉄板を熔接している。用途は不明。同型の古い片爪は昭和の初期頃まで使用されていたといわれている。

挿図10

6. 仁賀保町平沢漁協網小屋蔵知見・マッケ

片爪鉄碇。現品の用途は不明。爪は折り曲げた形である。熔接した鉄製カンザシのほかに、おそらく雑木をさしこんだかと思われるカンザシ環を持ち、2本のカンザシを使い分けたものと推される。鉄製の方が横倒しを防ぐもの、雑木の方が浮力を与えるためか。龍頭環と爪折り曲げ部には網が巻かれている。これは、碇綱と碇頭綱の結びを強くするためと両綱の消耗を防ぐためのものか。

〔両爪〕

こんにち、もっとも普及しているものである。その形に注目してみると、いくつかのことがらが指摘できる。まずひとつは、純粋な鍛造品と熔接品のまじるこ

とである。すなわち、爪の数が四爪より少なくなると必然的にカンザシのような支持部を必要とするのであるが、このカンザシ取付けにまず熔接が加えられ、爪は鍛造であった。それが次第に爪部の熔接に及んでき

たようである。いまひとつは、爪の処理が曲線的なものから直線的なものになってきたということである。

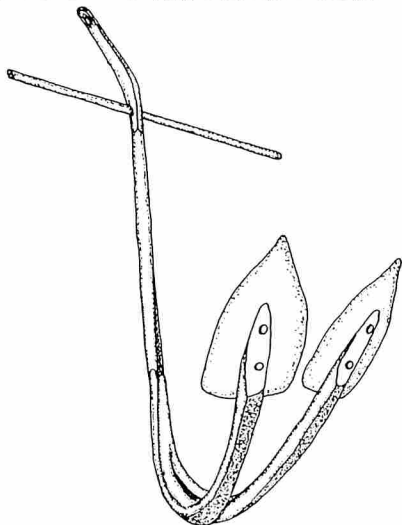
〔四爪〕

数は少ないが、漁船で使用された小型のものと、いわゆる弁才船の如き大型商船で使用されたものに大別されよう。前者については、下記金浦町のものと男鹿市門前（未調査）のものぐらいである。後者については、下記データ表に示したとおりである。ただし、県内には推定11頭以上あるものと思われるが、今回は、そのすべてをあげることはできなかった。いずれにせよ、弁才船の四爪碇とはいえ、100kgをこすほどのものは、そう多くはあがっていない。まして、二千石積級の一番碇（100貫）クラスは、県内では見聞きしない。

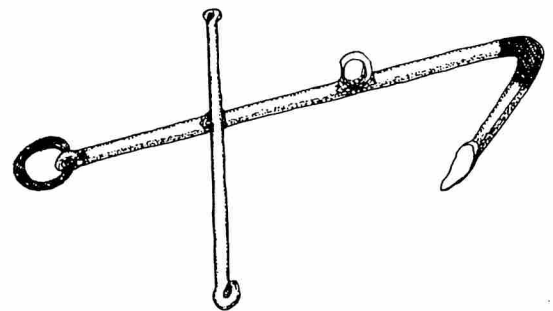
挿図11

1. 金浦町金毘羅神社奉納

重量4貫強。



挿図9 イカリ（同前蔵）



挿図10 マッケ（仁賀保町漁協蔵）

長い間、海底にあったようで、全体が劣化している。周囲は、砂泥や貝類におおわれている。漁船が使用したものか。

2. 弁才船に積まれていたものと思われるもの。

①象潟町郷土資料館蔵

全長140.5cm(以下同じ) 爪基 9×5 計算重量
爪長50.5 龍頭基 3×2 約6貫

② 同 上

全長105 爪基 14.5×8 計算重量
爪長56 龍頭基 欠失 約9貫

③ 同 上

全長148 爪基 12.5×7.5 計算重量
爪長49 龍頭基 5×3.5 約15貫

④ 同 上

全長177.5 爪基 16×9 計算重量
爪長47.5 龍頭基 6×3.5 約24貫

⑤ 同 上

全長267 爪基 20.5×12.5
爪長81 龍頭基 7×11

⑥能代市教育委員会蔵

全長258(龍頭欠失) 爪基 24×17
爪長82.5 素胴端 5×3.6

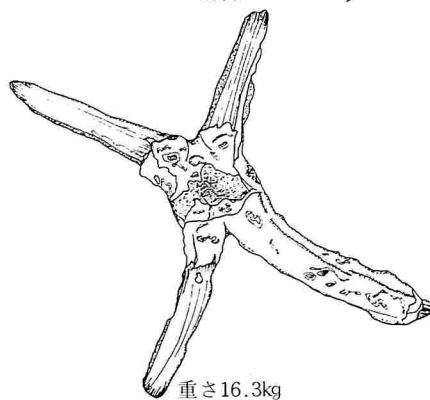
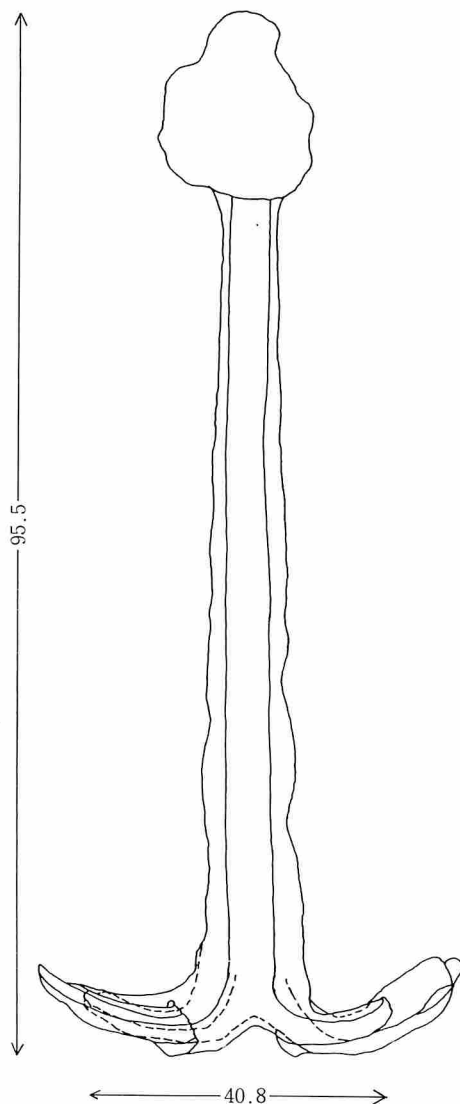
⑦本荘市石脇、村井恭司氏旧蔵

全長188.5 爪基 12.5×7
爪長59 龍頭基 4.9×3.6
重さ63kg

上記のほか、最近、海底より引き上げられたと聞く男鹿市の3頭、それに秋田市土崎港多聞院蔵の1頭が筆者の把握するすべてである。これら以外にもまだあるものと考ええる。

まとめ

1. 石と木からなる古典的な碇がある。それは、マッケヤ、マッカなどと呼ばれ、今日なお、調査可能である。爪の数は、基本的にはひとつであるが、なかには、四爪につくるものもある。カンザンは、使い調子をみて、その位置が決められ、カンザンの両端に石を結びつけるのを特徴とする。^{挿図12~13} 県外の例では、カンザン中央部に1箇結びつけられる例がある。
2. 鉄製の碇がある。今日では、碇をすべて、アンカーと称するが、なかには、古い型のマッケヤを模したと思われる鉄碇がある。そのため、材質的には近



挿図11 小型四爪 (金浦町金毘羅神社奉納物)

代的な鉄を使用しても、なお名称上は、マッケヤをとなえる例がある。それは、概ね一爪の場合に限られている。そのうえ、漁網の大型化とともにこの一爪鉄碇も大型化をたどってきたといえよう。

二爪鉄碇は現在の普遍的なアンカーで、なお、改良され続けているが、停泊用としては、衰退傾向にある。

四爪鉄碇は、弁才船のそれとして有名であるが、漁師が用いてきたものは、短命であった。その大きな原因は、爪の多さが逆に船上での作業能率を著しく損なっていたからである。

3. 木碇から次第に鉄碇へとうつりかわってきた。鉄碇のうち、古いのは四爪碇であった。しかし、現実にはそれらが併存しながら、より都合のよいものへと選択されてきたことがうかがわれ、けっして旧形式が駆逐されてきたものではなかった。
4. 碇には、停泊用だけでなく、むしろ、それ以上に重要な用途があった。漁網を固定するというのである。潮の流れの中でも常に一定の網張りを維持するという、漁師の生命線にも匹敵する役割である。
5. 以上の諸点を掲げつつ、今後のことに及ぶとすれば、まず第一に、用途・用法を正確に把握すること、二に、消えていった碇の原因如何、三に碇自体の伝播乃至今日の流通形態（調達方法）等々を明らかにする必要がある。本文中には、一部それらに言及した事例もあったが、すべての事例において考究できなかったうらみがあった。

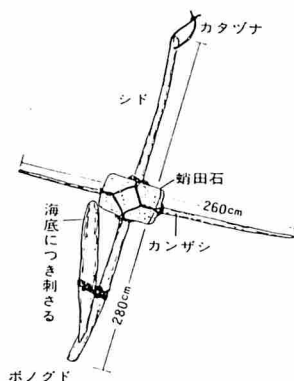
おわりに

本稿をなすに際し、下記の方がたの協力を得た。記して感謝申し上げます。〔昭和町教育長・門間光夫、同委会・瀬下三男、仁賀保町教委会・安倍 溥、金浦町教委会・佐々木 完、象潟町郷土資料館長・横山正義〕

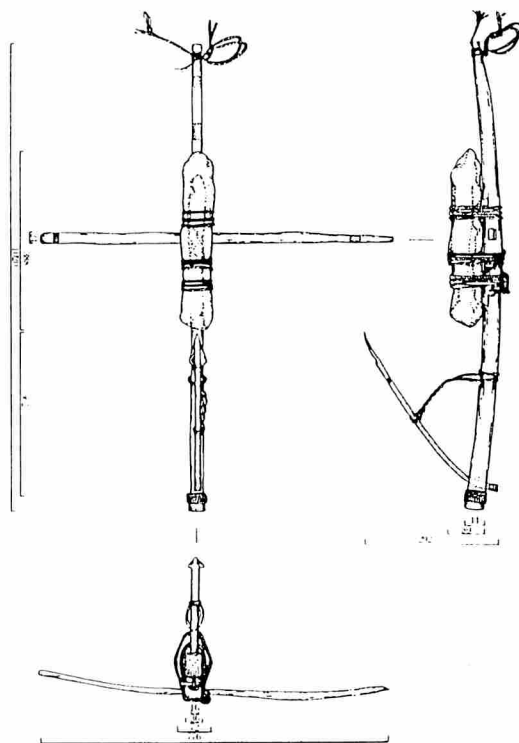
なお、末筆ながら、資料等の整理には県立博物館工藤真弓さん、英文については同じく佐野エリザベートさん、御二人の協力を得たことを付しておく。

註

1. 石井謙治著『図説・和船史話』（至誠堂、1983・7・30発行、pp. 322～326）



挿図12 青森のイカリの一例
（『九艘泊・蛸田の民俗』青森県立郷土館
1979年発行.p421に拠る）



挿図13 岩手のイカリの一例
（名久井芳枝著『実測図のすすめ』
一芦舎1986年発行.p28に拠る.実測図
製作者・名久井芳枝）

補 遺

[金浦町における碇の概要]

1. 石 碇

自然石を縄編みにし、綱をつけ、建網固定用としたもの。綱をおこす際になかなか上がってこない時などは、綱と碇をつなぐ綱を切りはなして用いる。いわば使い捨ても可能と聞く。現在は用いられず。

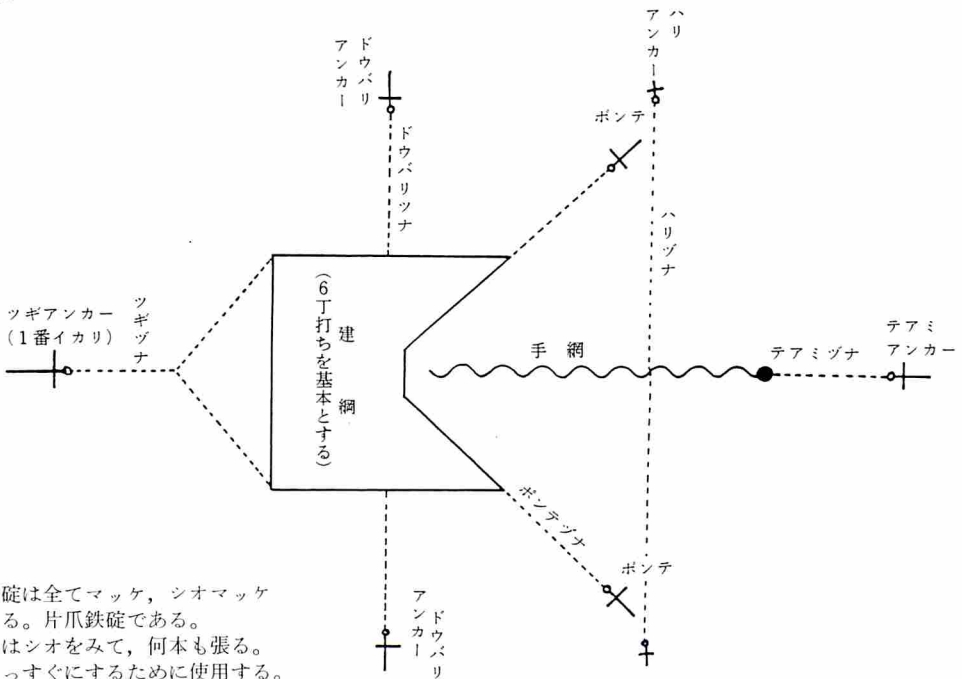
2. 木 碇

マッカ木を利用したもの。マッカ木を四本抱きあわせて1本にまとめたもので、素胴に自然石を結びつけて使用された。これは、木碇ながら四爪の形になる。現在用いられず、停泊・建網两用か。

3. 鉄碇 (四爪)

前掲四爪碇冒頭のごとき碇である。停泊・漁網両用であった。しかし、いずれも早い時分に、他にきりかわった。その原因は、船上に何頭もの碇を置いた場合、作業に相当の困難が生じたためであった。漁網を持ち運ぶにも、綱の引っかかりや足場の確保にもままならない不便さがあったのである。その点、片爪碇だと、舷側に立てかけ、爪を外に出しておくことによって難は解消できるのであった。綱はカンカネ綱 (碇綱) と

—建網の碇配置図—



※使用する碇は全てマッケ、シオマッケと呼ばれる。片爪鉄碇である。
 ※※ハリツナはシオをみて、何本も張る。手網をまっすぐにするために使用する。

爪に結びつけた頭綱 (碇頭綱) の2本を用いる。頭綱の先にはウキがつく。

4. 鉄碇 (一爪)

マッケという。現在もなお、建網固定用に主用される。網の大型化に伴ない、30貫目位のものまで用いる。素胴と爪部が鉄一材からなり、カンザシ環を設け、それに木をとおし、カンザシとする。カンザシ環の位置は、象潟町のマッケヤなどと異なり、素胴中央付近につく。カンカネからのびる綱は20~30m位の長さで、その先端は網の足につく。カンカネ綱が長いほど、爪には合理的な力がかかるのである。碇の取り上げには頭綱の先につくウキを頼りにして引き上げる。

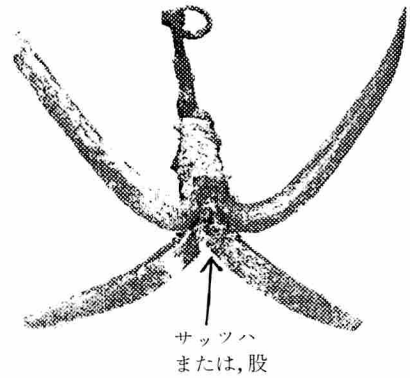
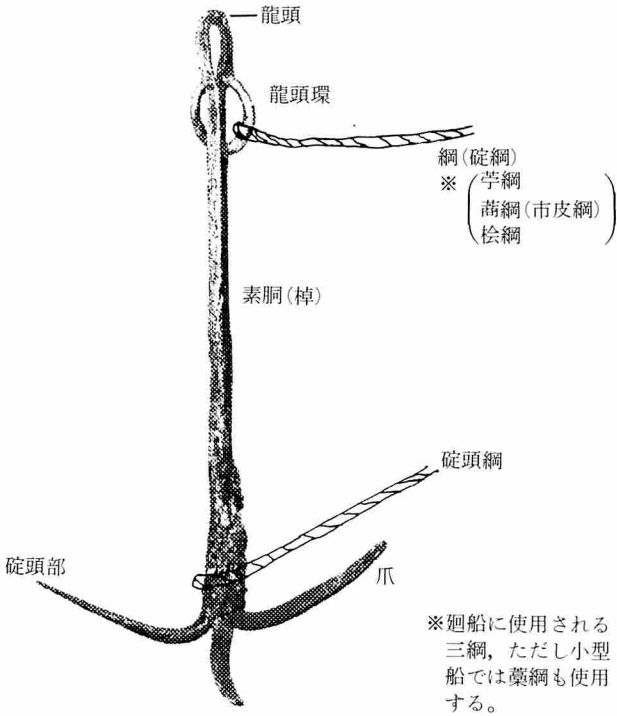
5. 鉄碇 (二爪)

停泊用として主用される。胴部と両爪一材式から、爪部を熔接するもの、あらかじめ爪が入るような穴を素胴に設けておき爪をさしこんでから熔接するもの等各種ある。カンザシも素胴に直交させてから熔接したもの、左右別材をそれぞれ素胴につけたもの等ある。

以上が、おおまかな碇の種類である。本項は、金浦町佐藤修市氏、佐々木茂氏、畠山悟教育長、斉藤満企画室長、佐々木完主事の協力を得た。

参 考

1. 四爪碇各部名称



2. 積石数と碇との関係表

一五〇〇石	一〇〇〇石	八〇〇石	五〇〇石	一〇〇石	〔積石数〕
八	八	七	六	三	〔数〕
九八貫	八〇貫	六八貫	五〇貫	二〇貫	〔一番碇〕
二、五五トシ	一、六九トシ	一、三五トシ	〇、八五トシ	〇、一七トシ	〔総重量〕
	四、五〇貫	三、六〇貫	二、三五貫	一、七五貫	

石井謙治先生の御所見によると、本表は『大和型船製造寸法書』(通信省管船局刊, 明治35年)のデータを利用したものであるが、江戸時代の多数の実例とかなり異なるということである。だいたい、一番碇で15~20%小さく、従って、総重量も減じて考慮する必要あるという。(1988.12.23付書簡による)

Types Of Anchor In Akita Prefecture

by

Tadakazu SHIMADA

The structural changes in the make and style is an important aspect in the study of anchor. Simply stated, it was a shift of material from stone and wood to iron.

This article focuses on the traditional anchor "Makke or Makka" Which means fork in Akita dialect.

There are two different types of anchor: A) the wooden made anchor is fomed by extracting one element from a living tree: B) the iron anchor in use nowadays has two arms and one stock like the bower anchor in the West.

Of course, I'm sure these two types are not only seen in Akita, but also in many coastal areas in Japan. The number of arms determines the difference between A) and B). In a word, the wooden anchor has one arm and the iron anchor has two or four arms. But these are not decided differences in recent use. The reason is that nowadays the two types of anchors are made of iron. The one arm iron anchor is used to hold fast fishing nets. And the two arms one is for anchor. Therefore, it may be said as a conclusion that the utilization is more important than the make.